被爆・戦後80年
平和とよりよい生活のために

とちぎコープの組合員から寄せられた「平和のメッセージ」

生活協同組合はその歴史の中で「平和とよりよい生活のために」を掲げ、平和について学ぶ、考える、伝える活動に取り組んできました。

2025年は被爆・戦後80年の節目の年です。あらためて平和について考え、想いを馳せる機会とするため、「平和のメッセージ」を募集しました。

お寄せいただいたメッセージをご紹介します。

わたしの戦争体験

鹿沼市　駒場一男さん　90代

日本とアメリカが戦争に入った昭和16年は、わたしが7歳（小学1年生）の時だった。連日ラジオから流れる戦況のニュースは、最初は勝ち戦で少年のわたしはワクワクしていた。4年間の戦闘で日本は敗戦国となり、わたしは小学5年生になっていた。日本は極端な食料不足でアメリカ兵が来ると家畜の馬や牛を食べられてしまうという噂が村に流れた。村人は自分の飼っていた馬や牛を山林の中でと殺し、それを食べた。戦時中に流された日本軍のプロパガンダはうそが多く、国民がだまされていたと気づいたのは戦後何年か過ぎたころで、わたしの青年期のころであった。

宇都宮市　田中秀子さん　80代

1945年7月12日深夜、米軍爆撃機B29が宇都宮市街に焼夷弾を落下させた宇都宮大空襲。空襲警報に目を覚まし、窓の外を見たら空が真っ赤だった。急いで身支度をして田舎の方へ母親と姉・兄たち8人で田んぼ道を一列に並んで逃げた。火柱となった焼夷弾が雨のように降る中を当時私は8歳、家族とともに無我夢中で逃げた。空襲がおさまり、朝方家へ戻ってみたら、わが家の反対側の家々は全部焼失していて、それまで建物に遮られていて見えなかった二荒山神社が丸見えだった。簗瀬小学校に炊き出しのおにぎりをもらいに行ったとき、校舎の焼け跡に黒い山のような物が見えた。それは校舎の中で犠牲になった人々の亡がらだった。この光景は80年たった今でも深く脳裏に刻まれ忘れられない。

年が明け、数年前に出征していた兄の戦死公報と同時に遺骨の箱が届けられたが、箱の中には何も入っていなかった。享年21歳。

宇都宮市　井澤知子さん　80代

海軍兵だった父は、自分たちの船が敵に爆破され海に放り出され、助けを待つ間何日か海に漂っていたそうです。この体験を子どもの私たちに何度も話しました。それは決まって囲炉裏を囲んでいる時でした。戦争は悲しくてむごたらしい。海の向こう（ウクライナ）の戦争も早く終わってほしい。人と人が殺しあうなんてこれ以上愚かなことは他にありません。

小山市　たき火のマシュマロさん　50代

昭和18年生まれの母は、第二次世界大戦の真っ只中に生まれました。

物心つかないほど幼いある日、空に沢山のトンボが飛んでいるのを見たそうです。その時、近くにいた祖母がとっさに母に覆い被さり畑の畝の間に身を挺してかばってくれたそうです。ふと気づくとトンボだと思ったそれは沢山の戦闘機だったのです。

あの時、祖母がいなければ…と思うと怖くてゾッとします。私や娘が今、こうして元気に暮らしていられるのも、戦時下を生き抜き、命を繋いでくれた母や祖母たちのお陰だと日々感謝をしています。

平和を実感するとき

下野市　晴野風さん　70代

仏壇の遺影は、農家の長男として生を受け、24歳の若さでパラオ諸島にて戦死した私の伯父。県外で職についていた次男の父は、呼び戻されて就農した。戦争のことは語らなかった父だが、実兄の戦死という理不尽な時代と、生き方を変えざるをえなかった悔しい思いを、酒が進むとよく聞かされた。

終戦から80年、県戦没者合同慰霊祭に参加した。当然のように享受しているこの平和や自由が、とても尊いことであること。自分の命をかけて家族やこの国を守ろうと志した若者がいたこと。政治思想の違いで世の中は大きく変わってしまう。歴史を正しく学び、次の世代に伝えていくことを、私たちは忘れてはいけない。

平和を守るために自分にできること、やりたいこと

宇都宮市　おとめミルクさん　50代

私は広島に生まれ、結婚を機に栃木に来ました。広島に原爆が落とされた8月6日は、忘れられない、忘れてはならない日だと思っています。小学生の時の保健の先生が被爆者でした。私たちはある日無邪気に聞きました。「先生の顔、何でボコボコしとるん？」。先生は8月6日、窓の近くにいて爆風で飛んできたガラスの破片が顔に刺さり、手術をした痕なのだと話してくれました。私たちは無言で、息を呑んで聞いていました。先生は、身をもって戦争の恐ろしさを伝えてくださいました。

栃木では、原爆の実態を知らない人が多いと思います。私は、小学校で平和に関する絵本の読み聞かせをしたり、夏休みに図書室を借りて原爆写真展を行ったりしてきました。どの子もしっかりと見て、感想を寄せてくれます。被爆体験を直接聞いた世代の役割として、これからもできる形で平和を訴えていきたいです。

那須町　菱沼真喜子さん　60代

戦争で多くの方々の命が奪われ、多くの方々が傷つき、悲しみ、苦しまれました。そして今も多くの方々が苦しまれています。戦後、誕生した日本国憲法の前文を声を出して読みました。感動して、涙が出ました。残念ながら、被爆・戦後80年の今、この理念が生かされているようには思えません。人として大切なことは「愛することと信じること」だということを私はこれからの世代に伝えたい。今、私のできることは、子どもたち、大人たちに平和の本を読み、歌うことです。人との繋がりを大切にし、平和な社会を守り、子どもたちに未来への希望を託したいです!!

わたしの戦争体験（インタビュー）

宇都宮市　長岡ヨシエさん　90代

私は、昭和6年生まれの東京育ち。6人姉妹の長女です。旧姓は須藤といいます。14歳で東京大空襲にあいました。

そのころ私は東京府立第六高女の2年生。母と妹たちは母の実家（栃木県小金井）に疎開していましたが、父は仕事で東京を離れられず、私は、長女だから父と家を守るのは当たり前と思って家事をしながら女学校に通っていました。けれど学生も勉強どころではなく、毎日のように無線機の部品を作っていました。いわゆる学徒動員。学校が工場のようでした。

東京大空襲は本当に恐ろしかった。B29がゴーッと音をたててやってきて、焼夷弾をバラバラバラ落として火の海に。父と2人、炎の中を、自宅があった新橋から愛宕山まで逃げました。防空頭巾をかぶっていましたが、焼夷弾が直接あたったら、もちろんひとたまりもない。壊れた物の破片やら何やらいろんなものが飛んでくる。よく生き残ったと思います。生き残った人と亡くなった人と、何が分かれ目だったかわからず、もう運命としか言いようがありません。

焼け出されて、私や父も母の実家に疎開しました。こちらでは、松根油をとるために伐採した松の根を掘り出すこともやりました。当時は燃料がなかったのでガソリンの代わりにしようとしたのです。場所は今の石橋あたり。根を掘り出した後には、ジャガイモやサツマイモを植えました。食べる物がなくて、芋や芋の茎も貴重な食料でした。

今の人は想像もつかないでしょう。ドラマや映画のようでしょう。私は防空壕で寝たこともあるから、今、自分の家で布団で寝られることを本当にありがたいと思う。あんな思いは、子どもたちに決してさせたくないと思ってきました。でも今も外国では戦争があって、酷い目にあっている人たちがいる。本当に気の毒だと思います。

おしゃべり交流会の話題がきっかけとなり、コープの職員がインタビューさせていただきました。